

みんなの
ための
学校長会に

茨城県 学校長会広報

第242号

発行者
茨城県学校長会
会長 伴 敦夫
事務局
〒311-1125
水戸市大場町933-1
教育プラザいばらき内
☎ 029-269-1300
FAX 029-269-1304

特集

特色ある学校経営 行財政・調査研究委員会の要望や取組 先輩と語る会



目次

- 表紙写真に寄せて…………… 1
- (特集1) 特色ある学校経営…………… 2
- (特集2) 行財政・調査研究委員会
の要望や取組…………… 6
- 課題「新学習指導要領が求める
これからの修学旅行」…………… 7
- (特集3) 先輩と語る会…………… 8
- 経営研究「創意工夫を生かした
特色ある教育課程」…………… 11
- 市町村教育委員会と学校長会
特別寄稿「科学的な学校運営」…………… 13
- 梅のかおり…………… 15
- ひばり…………… 17

外国語活動の推進

下妻・総上小

杉山 靖

本校は昨年度から、朝の一五分のモジュールと四五分の授業を連携した外国語活動の研究を全学年で推進しています。

低学年では全体で英語の楽しさを味わい、中学年では英語でのコミュニケーションの楽しさを味わい、高学年では英語で対話を継続する楽しさを味わっています。学級担任が率先して英語を使うことにより、教室全体に英語を使うという雰囲気生まれ、児童の人間関係づくりや主体的な学習、生活態度の育成等にも効果が現れています。

特集
1

特色ある学校経営

特色ある学校経営を目指して

常陸大宮・大宮北小 田部田 康弘

本校は、水郡線の玉川村駅近くに位置しており、平成二二年四月に、旧玉川小学校と旧塩田小学校が統合され、大宮北小学校と改名された学校である。全校児童九二名、教職員数一七名の小規模校で、「けんめい」の校訓のもと、知・徳・体の調和のとれたたくましく生きる力をもった児童を育成している。

一 子供歌舞伎の継承

復元された西塩子の回り舞台の公演をきっかけとして始まった「子供歌舞伎」を旧塩田小学校が行ってきた。その「子供歌舞伎」を大宮北小学校で継承し、四学年が実施している。

西塩子の回り舞台保存会のご指導をいただき、常陸大宮市文化連絡協議会の支援によって毎年一月に行う「北小祭」で

演目「子宝三番叟」「白波五人男」を演じている。

平成二九年度には、東京浅草公演や共楽館創建一〇〇周年記念公演で発表する機会をいただいた。



これらは、文化伝統の継承及び地域への愛着や表現する力の育成をねらいとして取り組んでいるものである。

二 考え議論する道徳の取組

平成二九年度より二年間、常陸大宮市教育研究会の指定を受け、道徳科の研究に取り組んでいる。

「よりよく生きるために、主体的に判断できる児童の育成」―自ら考え、話し合う道徳の授業づくりを通して―

のテーマを掲げ、本校独自の年間計画や別葉を作成し、道徳ノートの活用・相互授業参観・要請訪問指導等を通して、多様な指導方法や見取り方を学んできた。

本校の組織目標である「子供に考えさせ、判断させる場面をできるだけ多くすること」に関連させ、教科等横断的に研究を進めている。

三 詩作活動を通して表現力の育成を図る。

国語部を中心に、全学年で詩作活動を行っており、年間三回、代表児童による「詩のチャンピオン大会」を開催している。

詩の朗読は全て暗唱で行い、詩の内容に応じてゼスチャーを交えて発表する。この取組を通して児童は、皆の前で堂々と表現・発表するスキルを学び、それを全校児童が賞賛する姿勢が育っている。この行事は地域にも公開しているため、本校に足を運ぶ保護者も多い。

四 ランニングタイムの実施

体力の向上や健康に取り組む態度の育成を図るため、本校では朝のランニングタイムを位置付けている。音楽に合わせて自

分のペースで走り、月一回タイムトライアルを行っている。

また、体力テストの結果を踏まえ、児童一人一人に合った課題の設定や、学習カードの活用、投力アップチャレンジを行っている。

五 縦割り班活動での取組

本年度は、従来からあった縦割り班の活動を集約整理するとともに、縦割り班清掃を実施することにした。班の意識を高めるためチームカラー（旗）を設定し、より団結意識を高めている。

さらに「いじめ防止集会」では縦割り班での話し合いを取り入れ、各班で標語の作成を行うなど、より児童主体の活動を行えるように工夫している。

六 地域と連携した防災訓練

「自分の命は自分で守る」をキーワードに年間で五回の防災訓練を行っている。九月には、消防署や東野区自警団と連携し、煙体験や救助袋体験等、より実践的な活動を取り入れた訓練を実施している。

東野区自警団は、登下校時にパトロールのボランティア活動も行っており、児童の交通安全に貢献している。

「地域とともにある学校」づくりを目指して

―学校運営協議会制度を通して―

日立・駒王中 折笠 修平

一 はじめに

本校は、隣接地に明秀学園日立高等学校、歩いて数分の距離に日立第一高等学校・附属中学校、学区内に日立駅や市民会館、消防本部などがあり日立市の中心部に位置している。そのため、生徒が最も多かった時期（昭和四〇年頃）には、約二〇〇〇名の生徒が在籍しており、多くの卒業生を輩出し、地域には本校の卒業生も多い。しかし、在校生は年々減少し、現在は生徒数二九三名、学級数一一（特別支援三含）の学校である。

二 本市の学校運営協議会制度
日立市では平成二九年度「地域全体で子供たちの豊かな育ちを確保するための仕組みづくりを進め、質の高い学校教育の実現や地域の教育力の向上」を図るため、学校運営協議会制度のモデル校を導入した。二九年度は小・中一校ずつ、三〇年度は九校が指定された。本校は二九年度に指定を受け、単独で学校運営協議会を設置した。三〇年度

は学区の二小学校と併せて指定を受けた。委員は三校のそれぞれの学校運営協議会委員を兼務することとし、三校で一つの委員会としている。
三 本校学校運営協議会の取組
(一)協議会委員の構成
二九年度は、前年度の学校評議員、学識経験者、両コミュニティ代表（本市では概ね小学校学区を単位として組織されたコミュニティ推進会が、それぞれの地域の特性を活かしながら、特色あるまちづくりを進めている）、PTA代表、商店会代表、学区小学校二校の教頭、本校校長・教頭の二三名の構成とした。三〇年度は、学区内の二小学校と三校で一つの協議会として、両小学校のPTA会長、校長等を加えて、一九名の委員構成とした。各教頭は委員ではなく事務局とした。

(二)具体的取組

①職場体験学習への協力
「地域から学校に協力できることは何か」とい

う意見をもとに、職場体験先を開拓し、連絡調整するボランティアを募集することにした。一三名のボランティアが集まり、新たに六八箇所のお店や事業所が受け入れてくれることになった。

②地域・生徒・教職員・PTAの協働
年二回、土曜日に地域団体主催で、本校学区を流れている宮田川清掃が行われている。本校でも希望する生徒・教職員が毎回参加していたが、協議会でPTAの参加が提案された。昨年二回目の清掃時に保護者に向けて案内文を配付し、当日は地域・生徒・教職員・保護者約二五〇人が参加した。

③情報発信の工夫
協議会で、「地域に中学校の活動の様子が伝わっていないのではなにか」という意見が出された。そこで、近年地域に開放していなかった文化祭を参観していただくことになった。地域掲示板へのポスター掲示、吹奏楽部による学校近隣世帯への案内状配付を行った。文化祭を通して、本校の教育活動を理解いた

だく機会とした。今年度はさらに多くの人が参観できるように、合唱コンクールを市民会館で開催することが提案された。現在実現に向けて準備を進めている。

本校学区には、宮田並びに中小路の二小学校と二コミュニティ推進会があり、それぞれと連携を図りながら、敬老会や夏祭りなど各種活動に生徒が参加して地域の一員としての自覚を深め、自己有用感を高めている。今後は、学校運営協議会の熟議を通して、地域の「子供たちがどう育つてほしいか」というビジョン

次代をたくましく生き抜く心豊かで実践力のある生徒の育成を目指して

潮来・牛堀中 諸星 通哉

牛堀中学校は、潮来市の北西部に位置する全校生徒数一四〇名の学校であり、かの有名な富嶽三六景で「常州牛堀」として紹介されている、水と緑の景観に囲まれた水郷地域にある中学校である。

本校の生徒は明るく素直であり、大変まじめである。学習面においても生活面においても、一生懸命努力することができる

の共有を図り、地域と学校が一体となり、同じ方向を向いて子供たちを育んでいきたいと考える。



手際よく草を袋詰め
日立市駒王中 宮田川をきれいに
本校の生徒は、地域の清掃活動に積極的に参加し、環境美化に取り組んでいます。写真には、宮田川沿いの清掃活動の様子が写っています。生徒たちは、手際よく草を袋詰めし、地域の環境をきれいに保つことに努めています。

反面、自分の考えや意見を表現することが苦手であり、遠慮してしまう面が見られる。

そこで、本校の学校目標でもある「次代をたくましく生き抜く心豊かで実践力のある生徒の育成」を目指して、全職員で生徒の主体性を伸ばし、表現力を身に付けさせ、自信をもって次代を切り拓いていく力を育ませたいと考え、四つのプロジェクト

トを立ち上げて取り組むこととした。

一 確かな学力を育むプロジェクト

生徒の学力を向上させることは学校の責務である。本校では「わかる」「できる」力の向上を重点目標と定め、五つの具体的な施策により学力向上に取り組んでいる。本校独自に作成した「うしほり授業スタイル」は一時間の授業の流れや視点、指導のポイントを示しており、生徒の深い学びを引き出す授業改善に大きく役立てている。

また、本年度より新たに学び直しのための時間「ドリルタイム」を放課後に設定して、基礎・基本の定着を図るとともに、学び方についても確認している。

日々の学習活動を継続することにより、生徒たちは学力向上を実感してきており、さらに主体的に取り組もうとしている。

二 豊かな心を育むプロジェクト

「自ら考え、判断し、実行する力の向上」を重点目標とし、全職員で学級経営の充実を目指している。教師による居場所づくりと、生徒による絆づくりを積極的に推し進め、生徒一人一人が笑顔いっぱい生活できるように支援している。

また、年間を通して人権教育やいじめ防止教育に力を入れており、人を思いやり、支え合う生徒の育成にも努めている。

特に、いじめ防止教育においては、毎月「いじめをなくすための時間」を特設し、いじめ撲滅に向けての様々な取組を全校あげて行っている。

三 健やかな体を育むプロジェクト

学力向上、豊かな心とともに健やかな体を育成することは、学校経営の中で重要である。そこで、本校では「生活習慣の確立と体力の向上」を重点目標として定め、様々な施策を立てて取り組んでいる。

隣接している牛堀小学校と連携して安全教育・防災教育を推進しており、小中合同引渡訓練を二回実施する予定である。

健康教育にも力を入れていく。養護教諭が作成した「ヘルスチェックカード」を活用して毎学期ごとに組織的な健康相談活動を行い、生徒の規則正しい生活の実践につなげている。

四 保護者や地域との連携を深めるプロジェクト

特色ある学校づくりを進めるためには、保護者や地域の方々からの協力が不可欠である。生徒にとって安心・安全な環境づくりのために、保護者や地域と「組織的な連携向上」を重点目標として取り組んでいる。

いる。

本校では、各種通信やメールを活用しての情報発信に努めている。また、学校ホームページも毎日更新して、学校の様子を家庭や地域に届けている。さらに、学校評価を計画的に実施し、その結果をしっかりと分析・検討した上で改善

「おくのキャンパス」の実践

「地域の活性化と地域を支える人材の育成」

牛久・奥野小 青木 進 牛久第二中 高橋 浩一

一 はじめに

奥野小学校と牛久第二中学校は、牛久市の東部に位置している。畑作を中心とした農村地域で、人口減少や高齢化が地域の課題となっている。小中学校の児童生徒数も一九八一年頃をピークに減少し続けていた。

牛久市は、奥野地区に学校を存続させ地域コミュニティを守り育てるという方針のもと、奥野小と牛久二中で小中一貫した特色ある教育を実践し、魅力ある学校にしていくために、

奥野小と牛久二中、さらに奥野さくらふれあい保育園、奥野生涯学習センターを含めて、「おくのキャンパス」とした。また、奥野小と牛久二中に学校運営協議会を設置し、「おくのキャンパスコミュニティスクール」

に生かしている。

四つのプロジェクトを執行して「次代をたくましく生き抜く心豊かで実践力のある生徒の育成」を目指すため、私たち教職員集団は「チーム牛堀」として使命感と同僚性を持ち、本校生徒のよりよい成長のために全力を尽くしていきたい。

とし、学校と地域が一体となつて、学校教育の充実と地域の活性化に取り組んでいる。

二 おくのキャンパスの取組

(一) ビジョンの共有

おくのキャンパスグラウンドデザインを作成し、小中学校と保護者、地域の方々と、おくのキャンパスが目指すビジョンを共有し、共に子供を育てていく。

(二) 小規模特認校

奥野小と牛久二中は、小規模特認校で、牛久市全域から通学が可能になっている。現在、奥野小に四三名、牛久二中に一〇名の児童生徒がこの制度を利用して通学している。児童生徒数は、少しずつではあるが増加している。

(三) 英語教育

奥野小では、一年生から週三日、一五分間のイングリッシュタイムを行っている。ALTが二名、地域ボランティア、中学校の英語教師も支援に入り、充実した活動となっている。牛久二中では、英語の授業で、学級を二つに分けて少人数指導を行っている。また、二年生では福島県にあるブリティッシュヒルズで英語宿泊研修を行っている。さらに小中学校で、オーストラリアのオレンジ市の学校と、スカイプを使っての交流を継続して行っている。

(四) 環境・郷土教育 (ESD)

地域の方々とNPO法人の協力を得て、奥野小では地域の自然や環境、歴史について学び、牛久二中では小学校での学びを生かして、地域の課題をみつけれ、それを解決するために自分たち



にできることを考え、実践する学習を行っている。現在は、使われなくなった民家を利用して、地域を元気にする方策を探索している。

⑤地域との連携・協働

○教育活動への協力
イングリッシュタイムや読み聞かせ、学校行事、環境整備等に、地域の方々が積極的に支援・協力をしてくれている。また、学校運営協議会の委員の方々を中心に、人材バンクの整備を進め、教育活動への支援の充実に努めてくれている。

○土曜・日曜カッパ塾

地域コーディネーターが中心となり、土曜日、日曜日に英語や国語の勉強会、自然観察会、プログラミング教室、英会話教室等の様々な学習や体験活動を、小中学生と地域の方々のために行っている。

○おくのふれあいまつり

奥野地区の子供たちと地域の方々が一緒に楽しめるお祭りである。中学生は、小学生や保育園児、地域の方々が楽しめる遊びブースを開設して、お祭りを盛り上げるのに大いに貢献している。

三 おくのを支える人材に

おくのキャンパスの教育目標は、「夢と自信をもち、おくの

を支え、未来にはばたく児童生徒の育成」である。奥野小と牛久二中の児童生徒は、地域の方々と共に活動することを通して、地域に貢献したいという意識が高まっている。将来、おくの支えていく人材になれるよう、さらに地域と共にある教育活動を充実させていきたい。

児童一人一人の個性を伸ばし 夢をはぐくむ教育を目指して



古河・大和田小 野尻 勝

古河市立大和田小学校は、明治九年に開校し、一四二年の歴史と伝統のある学校である。本年度の児童数は七九名の小規模校であるために、かつて合併・統合の話があったが、地域で支えることを訴え、現在に至っている。そのため、地域と密接な行事が多く、正に「地域と共にある学校」である。温かな地域と協力的な保護者に支えられ、子供たちは、毎日元気に登校し、明るく元気に過ごしている。一学期末で欠席ゼロの日が四四日だった。

「人間性豊かなたくましい子ども」の育成を笑顔で気持ちよく伝えがらばりぬける大和田の子」を教育目標に掲げ、「児童が中心の学校」「チーム大和田」「教育のプロとしての資質・能力の向上」を学校経営の基本

方針として全職員一致団結して教育活動に取り組んでいる。

一 プログラミング教育

本校は、プログラミング教育では先駆的な取組を実践してきた。平成二七年にタブレット端末（児童一人一台）が整備され、文部科学省情報教育指導力向上支援事業のプログラミング教育実践校に指定されたのをきっかけにプログラミング教育に取り組んできた。当初はわからないことだらけだったが、大学教授や企業の講師を招き、プログラミング教育をどのように授業に取り入れていくかを模索した。現在は「教科のねらいを達成するためのプログラミング教育」という基本的な考えに基づいて、本年度は理科を中心に研究に取り組んでいる。先駆的に取り組んできたことよって、アプリや教材等の

環境が整えられ、児童も職員も当たり前のようにタブレット端末を活用して授業を行っている。

本年度は、茨城県小学校プログラミング教育推進事業のモデル校に指定されており、一月と二月に授業を公開する予定である。この恵まれた環境を生かし、自分に自信のもてる子供たちを育てていきたいと考えている。

二 地域と共に夢を育む

本校は、経済的にも、マンパワー的にも地域に支えられて様々な活動が展開できている。地域と共に行う活動には主に次のようなものがある。

(一)エンジョイサタデイ(年八回)

地域の方々に講師に、様々な体験活動を実践する。

(二)伝統行事(夏祭り・神輿等)

地域の伝統行事に参加する。運動会は、たくさん地域の方々が来校する地域の一大イベントである。また、様々な機会に地域の方々が参加してくださる。

本年度実施する主な体験活動は、次のとおりである。

(一)オリンピック・パラリンピック教育推進事業

(二)体育授業サポーター派遣事業

(三)文化芸術体験出前講座(音楽・美術)

この温かな地域に学校が応えられることは、豊かな教育を

実践し、児童一人一人の個性を伸ばし、夢を育むことだ考えている。

三 児童が中心の学校

古河市は、教育活動支援員・学校図書支援員・理科支援員があり、児童数が少ない本校にも同じように配置されている。そのため、児童一人一人に本当に手厚い対応ができています。しかし、児童の実態を正確に把握し、より個に応じた指導ができていくかという課題もある。

よりきめ細かな個に応じた指導を実践するために、一学期、配慮を要する児童に対しては、カルテのような個票を作成した。学習面でも同じような取組を二学期以降に実践したいと考えている。

本校は、職員数も一二名しかない。無駄を省き、課題を解決するための創造的な取組を実践してこそ、質の高い・豊かな教育が実践できる。また、職員も育つ。校務分掌明確化シートは、その具現化の一方策として全職員で取り組んでいる。

「すべては子供のために」を合い言葉に、「児童が中心の学校」を推進していきたい。



特集 2

行財政・調査研究
委員会の要望や取組

平成三十二年「教育行政に関する
要望」―その概要と経過―

行財政委員長 沼田 祐一郎

〈要望の概要〉

詳細は要望書をご覧ください。

I 国への要望

○義務教育標準法の改正による教職員定数の改善

○多様な教育課題に対応するための加配定数の増

○小学校第二学年以降への『三五人学級』の拡充、早期実現

II 県への要望

一 きめ細かで質の高い教育を子供たちに保障するために

(一) 少人数学級並びに少人数指導にかかわること

① 「楽しく学ぶ学級づくり事業(小一〜六)」の継続

② 「中学校生活充実支援事業(中一〜三)」の継続

③ 「安定した学級・良好な人間関係・教師のきめ細かな指導」が可能となる少人数指導のための加配措置の拡充

④ 特別支援学級編制基準(対象児童生徒数)の弾力化

(二) 確かな学力の育成にかかわること

① 小学校における学びの広場サポートプラン事業の

継続

② 中学校における学びの広場サポートプラン事業の継続

(三) 新学習指導要領の実施にかかわること

① 「特別の教科 道徳」に関する研修の充実

② 小学校における外国語及び外国語活動に関する研修の充実

③ 小学校におけるプログラミング教育に関する研修及び資料・教材等の充実

二 学校組織の充実と活性化を図るために

(一) 新規採用にかかわること

① 新規採用者の計画的・継続的な確保と教員志願者を増やす取組の工夫

② 優秀な人材を確保するための採用方法の工夫

(二) 人事による活性化にかかわること

① 小学校における理科・英語・数学免許所有者の計画的な配置

② 専門的・補助的スタッフの配置

③ 常勤・非常勤講師の確保

三 充実した教職生活の実現のために

(一) 管理職の待遇改善にかかわること(以下略)

(二) 教職員の勤務時間の適正化と健康管理にかかわること

① 勤務時間の適正化に関する共同研究の推進(以下略)

(三) 教職員の育成にかかわること

① 若手教員研修制度の見直し(以下略)

② 特別支援免許状取得の促進(以下略)

四 本県教育の一層の充実・発展を図るための市町村当局への助言について(以下略)

〈要望書作成の経過〉

六月一日〜全小中学校への調査(県の教育情報ネットワークの活用)

六月二八日〜アンケート調査結果の集約、分析、考察

七月一〇・一二日 県学校長会役員等との要望書内容の検討

七月二七日 常任評議員研修会において要望書案の説明・協議

八月二日 要望書に関する前協議

八月二八日 県教育庁への要望書の提出

調査研究委員会の取組

調査研究委員長 佐藤 隆

研究(第一部会)

○教員の勤務実態(勤務時間、業務内容・意識等)に関する調査を抽出校を対象に実施し、行財政委員会と連携しながら、県への要望書作成、県との共同研究に資する。

○進捗状況

六月七日 協力校へ調査依頼

六月二四日 アンケート集約

七月 集計・考察

四つの活動を行っている。

一 今日活動に関する調査と

二 具体的な活動と進捗状況

三つの部会を設定し、次の

課題



新学習指導要領が求める これからの修学旅行

県学校長会副会長 鈴木 洋一
(日立・助川中)

三〇数年前、市の修学旅行委員会が班別行動を提案した。前例がない、安全確保に不安があるとの理由で一時は却下された。しかし、当時の校長の後押しで、どうにか実施にこぎ着けた。翌年には五校が班別行動を取り入れた。

奇しくも、今年度、関東地区公立中学校修学旅行委員会の会長役を仰せつかった。そこでは、「学びの集大成を図る修学旅行」を研究テーマとして、よりよい修学旅行を求める活動を行っている。

修学旅行は、かつての観光型から、自分たちの責任と主体性で行動する班別行動、そして、最近ではキャリア教育や平和学習、環境学習や防災学習など、より明確な課題を探究する学習や体験学習を取り入れた活動も珍しくない。

新学習指導要領の改訂で問われている「何を学ぶか」「どのように学ぶか」「何ができるようになったか」という視点は、学校教育全体の重要な方向性であるとともに、修学旅行

の教育的価値や質的な改善に大きな意義があることを改めて感じる。

修学旅行の導入段階では、生徒同士や教師との対話があり、ワクワク感、ドキドキ感を実感する。計画段階や個別、グループでの調べ学習においても、生徒の意欲は持続する。現地に行けば、土地の方々との対話があり、歴史的な建造物を見れば、歴史上の過去の人物との対話もある。

事後のまとめでは、プレゼンテーションを行うための新たなスキルを身に付け、旅行全体から五感を通じた自己との対話がある。以上のことから修学旅行は、「主体的・対話的で深い学び」そのものであるといえよう。

では、課題は何か。関東の中学校の九割が新幹線を利用して、奈良、京都へ行くというパターンができあがっている。本県も同じ傾向にある。かつて、観光型修学旅行から班別行動へと活動の主流が移行した。今度は、「何を学ぶか」「どのように学ぶか」「何ができるようにな

るか」を追求するために「旅行先」を考え直す時期に来ているのではないだろうか。

これまで京都は、修学旅行生を中心に受け入れを行ってきた。しかし、今後の生徒数の減少やオリンピック開催に焦点を合わせて外国人観光客へシフトしていく方向であると聞く。例として、宿は修学旅行専用の大広間から外国人のための個室へと改装を進めている。反対に、北陸や東北をはじめ、様々な地域では、修学旅行誘致に積極的であり、豊富で充実した体験プログラムが開発されるようになってきた。

これらを踏まえ、各校では、修学旅行に教育活動としてどのような意味をもたせるのか、また、特別活動の視点から明確な位置づけを図るよう、校長がリーダーシップを発揮することが待たれる。

しかし、連合体を構成している中学校では、校長が赴任した時には、既に二年先までの旅行先が決定している。このことに対応するためには、単位となる連合体修学旅行委員会の中・長期的な取組が必要になる。正に連合体としてのチームワークが不可欠であり、変革を成し遂げるための気概が条件となる。

二 特色ある教育活動の調査 (第二部会)

八月二八日 要望書提出
〇各小・中・義務教育学校の研究・研修の充実発展に資することを目的に調査を実施し、結果を県学校長会webページに掲載する。

〇進捗状況

六月一四日 調査依頼
七月一三日 集約

七月 集計

八月 webページ作成

九月 webページ掲載

三 勤務実態(時間)に関する調査 (第三部会)

〇全ての公立小・中義務教育・特別支援学校を対象に超過勤務時間等を調査する。

〇進捗状況

九月三日 調査依頼

十一月九日 集約

十一月 集計・考察

四 全連小・全日中の調査及び編集等への協力

〇全連小各種委員会の調査協力
・標準法 ・施設設備教材等
・教員養成 ・給与年金
・教育改革 ・教育課程
・現職教育 ・特別支援教育
・健全育成

〇全日中「全国中学研究校便覧」及び全連小「全国特色ある研究校便覧」の掲載校推薦

Ⅲ 六月の一週間について実施

した第二期中期ビジョンに関する特別調査「教員の勤務に関するアンケート」結果から(抜粋)
県内の小学校・中学校各二〇校計四〇校の教諭等約三二〇名を対象に実施した。

〇勤務に「多忙感を感じる」が五六・三%、「やや感じる」が三七・七%、合わせて約九四%が多忙感をもっている。多忙感の主な要因は、小中とも授業準備、成績処理が多く(成績処理は特に中学校)、他に小学校では、学級経営に関すること、中学校では、部活動が多かった。

年代別では、二〇歳代・三〇歳代より、四〇歳代・五〇歳代の多忙感が高かった。
〇平均して毎朝七時前に出勤する者が二四・六%、同じく夜七時以降に退勤する者が七七・四%であった。

〇自宅に仕事を持ち帰る者は、平日が五六・七%、土日が五九・〇%であった。
〇土日に学校で仕事をする者は、土曜日が四六・六%、日曜日が三〇・〇%であった。

要望として、調査・報告書を減らす、出張を減らす、作品募集を減らす、学級の児童生徒の定員を減らす、教員を増やす等が多く挙げられた。

特集3

先輩と語る会

八月三日
教育フロンティアはらき

はじめに

今年度は、一三名の先輩校長の皆様にご出席いただき、「働き方改革を推進するために」をテーマに、「行政との連携で、どのように実現していくか」並びに「学校の取組として、何ができるか」の二つの視点から話し合いをしていただきました。



※ゴシックは先輩校長

【第一分散会】

▽働き方改革を推進するために行政との連携を図るうえでの課題等をお聞かせください。

・この四月から校務支援システムが導入されましたが、先生方

減らせるものは減らしていくなど根本を直さないと学校は楽にならないです。また、教員の仕事はキリがないけれど、それを楽しんでやっているかどうかも大切です。ほどほどにやるということを働きかけていくことも大切になると思います。また、事務加配も必要ではないでしょうか。

・勤務時間が長くても楽しんで充実感をもっている先生もいます。でも、担任から事務の仕事

を切り離して考えることも学校としてできる見直しにつながっていくと思います。

○国は格差是正をするために教育予算を握っているのだから、人員増、格差是正について発言

していいのではないかと思います。

○「退職校長会」は現職を応援する会として「学校からの教育改革」に大いに期待しています。

得るより失うものが多い改革には、あきらめずに声をあげてほしいです。

○学校の統合にしても、経費削減の発想であって、教育としてはどうなのか、本当に子供のためになるのかと考えてほしいです。

○校務支援システムの導入により、チェックが増えるという弊害もあるのではないのでしょうか。

○管理部門なのか指導部門なのかよく見極めて、行政の言われるままに導入するのではなく、良い部分とはずす部分を明確にしていっての方がいいのではないのでしょうか。

▽学校の取組としてできることについてはどうでしょうか。

○現役のときにはついぞ考えたこともなかったが、働き方という視点がでてきた今がチャンスだと考えます。校長として削減できることはないのでしょうか。

○学力テストの業務などは、比較されることで負担感が増しているのではないのでしょうか。

○負担感を軽減させるためには、楽しい職場づくりをすることが大切です。

・教員が遅くまで残っていないことは子供のためであるということを校長が発信していくこと

も大切だと考えます。

・PTAの集まりを三割カットしたことで、PTAの協力者が増えたということがありました。

○小規模校、大規模校を横並びにするのではなく、その校ならではのことを思い切ってやればいいと思います。

○教育委員会から下りてくる作文や絵の作品募集、その審査や、大会の審判などどこで切るかは難しいでしょうけれど、何でも引き受ける必要はないと思います。

○学力診断のためのテストは、現代的な視点をもって見直していてもよいですが、作問から解答作成までを教員が行うことで、授業改善につながるかどうかやってくるものなのです。

○道徳の教科化や閉庁日など、新しいものが入ってきていますが、しかし、不易と流行と見失わずに、働き方改革を進めてほしいです。

○先輩出席者

吉田 仁様 鯨岡 武様

土門 能夫様 東小川昌夫様

・学校長会出席者

伴 敦夫 鈴木 洋一

永田 博 沼田祐一郎



かよく見極めて、行政の言われるままに導入するのではなく、良い部分とはずす部分を明確にしていっての方がいいのではないのでしょうか。

▽学校の取組としてできることについてはどうでしょうか。

○現役のときにはついぞ考えたこともなかったが、働き方という視点がでてきた今がチャンスだと考えます。校長として削減できることはないのでしょうか。

○学力テストの業務などは、比較されることで負担感が増しているのではないのでしょうか。

○負担感を軽減させるためには、楽しい職場づくりをすることが大切です。

・教員が遅くまで残っていないことは子供のためであるということを校長が発信していくこと

も大切だと考えます。

・PTAの集まりを三割カットしたことで、PTAの協力者が増えたということがありました。

○小規模校、大規模校を横並びにするのではなく、その校ならではのことを思い切ってやればいいと思います。

○教育委員会から下りてくる作文や絵の作品募集、その審査や、大会の審判などどこで切るかは難しいでしょうけれど、何でも引き受ける必要はないと思います。

○学力診断のためのテストは、現代的な視点をもって見直していてもよいですが、作問から解答作成までを教員が行うことで、授業改善につながるかどうかやってくるものなのです。

○道徳の教科化や閉庁日など、新しいものが入ってきていますが、しかし、不易と流行と見失わずに、働き方改革を進めてほしいです。

○先輩出席者

吉田 仁様 鯨岡 武様

土門 能夫様 東小川昌夫様

・学校長会出席者

伴 敦夫 鈴木 洋一

永田 博 沼田祐一郎

角谷 直人 宮田 浩昭

久保智佳子 春原 孝政

【第二分散会】

▽働き方改革のために「行政との連携で、どのように実現していくか」「学校の取組として、何ができるか」という視点で、資料や現状を交えてお聞かせください。

○教師の業務の明確化・適正化と言われていますが、もともと教師は献身性があり子供のために様々な業務を行ってききました。「多忙感」をどうやって解消するかは以前からの課題でした。現職の立場から、もっと実態を行政に伝えるべきであり、人的な措置などを要望していくべきではないでしょうか。

・現状でも学級担任の業務については際限がないような状況で、それが行政職との大きな違いです。この部分を文化として残しつつ、行政に対してどのような要望をしていくかを考えていかなければならないということだと思います。

○今まで、人的配置はなされてきましたが、担任の多忙感が減少していません。学級担任制という日本の教育の良い点を残しつつ改革をするためには、教科担任制が一つの方法だと思えます。

○行政との関係でいえば、教員は優秀だから、大変でもやって

しまう点がある。そうではなく、建設的な意見をもちつつ、反対意見を出していくことが必要だと思います。

○行政では何か事業を起こすにあたっては必ず予算が伴います。学校は予算が伴わずにやる事が増えてくるようになっていきます。そこを調整するのが校長会であり、教員の認識を高めたいことも大切になってくるのではないのでしょうか。

○校長会として教員のために何ができるのかを勉強し、方向性を自覚していくことが存在意義にも繋がっていくのではないのでしょうか。

○校長会としても組織のスリム化などの組織改編を考えると大切だが、教員自身が働き方について意識を改革していくことも必要になってきます。

○学校の原点は、学力の向上、人間性の育成という大きな柱があり、この二点に絞って話し合い、見直していく必要があります。その上で、親が担うべき責任や行政に任せるべき業務などを見直し、教員としての本務に取り組めるようにすることが重要であると考えます。

○行政が掲げる事業に対して上意下達ではなく対等の立場で、現場を優先して交渉していくことが大切でしょう。

・校長として行革を進めながら足元を固め、現状を訴えながら校長会として、また一校長として行政に対して意見を述べていく必要があると思えます。

○人事面では、過去において小学校理科の教科担任制が実施されたことが評価されています。特に小学校の教員は空き時間がない中で授業準備に費やす時間をどう捻出するかが問題となっています。学校の実態を正確に伝え、教科担任制や少人数加配について、担任の持ち時間減を目的とした導入などを要望していくことも校長会としての役割ではないかと考えます。

▽後半は学校の取組についてお

話を伺いたいと思えます。

○組織として働き方改革をするにあたって必要なことは、人材確保と育成。次に、業務の効率化。そして、労働時間の削減の三つと言われています。一番目は学校での取組は難しいのですが、二番目三番目については学校で取り組めると思えます。理科の実験準備を一元化するなど、業務の効率化は学校の中にあるのではないのでしょうか。

○学校経営の視点から、組織のスリム化を図るべきだと考えます。職員一人一人がもつと自立して、それぞれが力をもち主任に一任することができれば、会議や打ち合わせに時間をとられることが少なくなると思えます。

○学校は勤務の特殊性がありません。しかし、一人一人の教員が意識改革を行い、事業には時間があることを意識して、効率化・能率化を図る必要があると思えます。

○部活動の取組はどうなのでしょう。

・原則として朝練は行わなくなっていますが、大会前の一か月を認めると朝練が多くなっています。学校評価でも部活動について保護者の意見は朝練について賛否両論でした。

○部活動は学校の存続にもかかわる重要な活動です。部活動の指導員の導入にも校長として教育委員会に強く要望していくことが役割だと考えています。

○閉庁日はどのようにしているのでしょうか。

・職員が強制的に休みを取るために教育委員会ごとに実施され、連絡等は教育委員会が窓口となるようになっていきます。

○授業時数を明確にカウントし、準備に何時間というような学校の実態を明確に示していくことと、改革にきちんと取り組み、明るい未来を示していくことが、新規採用者の増加にもつながるのではないのでしょうか。一人一人が本気になって、自分事として取り組むことが大切なことだと思います。

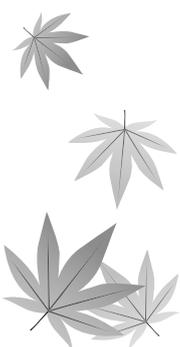
第二分散会

○先輩出席者

中川 實様 梅原 勤様
 鈴木 一司様 佐藤 和夫様
 小島 睦様

・学校長会出席者

鈴木 悟 篠原 陽一
 堀江 俊夫 古橋 賢治
 飯島 誠 長谷川 聡



【第三分散会】

▽行政との連携で働き方改革を推進するために、どのように実現していくか、先輩方からご意見を伺いたい。

○業務として調査・依頼に対して公会計・校務支援システム等が導入されている。県下統一ではない問題はあるが、業務の効率化は進んでいる。

・完全閉庁日も設定されているが、その他の日への負担が大きくなっている。研修等は減っていない。

・地区によっては校務支援システムの導入が進んでいない。校舎改築は進んでも、設備面は整っていない。また、特別支援教育支援員もなかなか付かない。

○校務支援システムは良いが、通知表や要録の作成のために、自宅からアクセスできない。

・持ち帰りの仕事ができないため、セキュリティ上便利だが、勤務時間は長くなっている。

○閉庁日について、全市町村に広がっている。年休は本来、月に二日程度処理できるようにしていくのが本筋ではないか。新採等休みが少ないことも考慮すべきである。

○閉庁日を年休扱いはいいが、勤務したい人もいるのではないか。電話対応等外部対応はしないことではどうか。

○超過勤務時間数を見ても、教員がブラック企業で働いているように感じる。アンケート結果を見ると、事務量の多さがトップになっている。文書を行政が作り、電話で済ませるのではなく、足を運ぶことも必要なのではないか。報告書の書き直しも行政がすべきではないか。時間管理の意識の薄さについて、時間規制をしてこそ対応策が生まれてくるだろう。役割分担が必要なのではないか。

○幼稚園職員や市職の人の休みは教員とは別枠にしてはどうか。▽働き方改革の推進のために、学校の取組として何ができるか。・時間管理のため、夜九時以降残らない、会議は一時間で止める等しているが、それでも中学校では一〇〇時間を超える超過勤務時間の者が多い。

・週時程の中に会議を入れるようにしている。終わりが決まっているため、効率的である。また職員の意向を踏まえ、部活動の朝練習を止めたところ、出勤時刻は変わらないが、余裕をもって業務ができるようになった。放課後の部活動の時間確保に努めた。学校評価によって今後を考えたい。職員の精神的負担も軽減できた。

○現場に行って小学校の教員のキツさがわかった。休憩は一時もない。中学校は全体の勤務時間は長い。空き時間がある。PTA連絡協議会の役員の方々にもそのような実態を知ってほしい。登下校時の管理も学校だという考えを変えていかなければならない。不安感やプレッシャー等いじめ問題対応の仕方についても教員の負担は大きい。家庭の責任や社会の風潮にメスを入れる必要がある。学校や教員の仕事についての線引きをすべきであろう。小

○校長が言葉にするとマスコミに叩かれる。校長会や退職者が声にすべきだし、市町村教育委員会が一番の理解者であるべき。教員から保護者に電話をするのがいい教員と言われるが、子供を自立させるには子供が都合のいいこと以外をきちんと話すようにさせるべきではないか。すべての者を学校が背負っているから業務量が多くなる。教育委員会に徴収金やスクールガイドについての協力を依頼できるのではないか。

○週時程の工夫で時間への意識改革を進めていく。行政が本腰を入れて支援すべき。忙しさの程度を世間が知っていない。生徒指導や、外部指導者等ポラン



ティアも学校が全てを行うのではなく、保護者や行政などが行うべきものがいくつもある。正論だけれど言い難いということは、校長会や行政の手を借りてはどうか。意識改革は行政にも必要だろう。定数改善を進めていかないと、負担軽減にならない。

○教員の志願者減少について、行政として課題を明確にして学校の職務についての世間の思い込みを改善させるようにしていかなければならない。過度な負担感・不安感が変わらなければ志願者は増えない。働き方改革は小手先であり、本質を変えなければならぬ。

○日本型教育(教育・清掃・給食)のスタイルを変えてはいけない。絶対的価値が無い中で、

どう生きていけばよいか、自分の考えがあつてこそ。先生方が連携して能力を発揮できる体制づくりが必要だ。教職員も話し合つて「主体的・対話的で深い学び」が必要であろう。実態を把握し、原因・理由を明らかにし、生徒指導も学年会も普段から投げかけておくことが求められる。

・職員、地域、行政の意識を変えていかなければならない。
・足を使って各現場で取り組んでいきたい。

- 第三分散会
- 先輩出席者
 - 中井川 正次様 鬼澤 明様
 - 飯島 郁郎様 砂川 洋一様
 - ・ 学校長会出席者
 - 鬼澤 真寿 塩幡 克三
 - 小野瀬 繁子 佐藤 隆
 - 中田 和彦 高橋 長男
 - 和田 雅彦

おわりに 先輩の皆様、教育にかける情熱を感じながらの会となりました。日本の教育のよさと働き方という一見相反するようにも見える新しいテーマに、校長会として挑戦していかなくてはという思いを強くしました。皆様には、今後ともご指導のほどよろしくお願いいたします。



創意工夫を生かした 特色ある教育課程

協働と対話のある教育活動の展開 ～キッズグループによる活動～

小美玉・竹原小 大津 浩

本校は、小美玉市の西部に位置し、水田など農業が盛んな地域である。全校児童は二二三名で、温かい地域の中でのびのびと生活している。しかし、一方では、外で集団で遊ぶ体験が減り、コミュニケーション能力の低下が課題となっている。

そこで、本校では、「協働と対話」の基本方針として「協働と対話」を掲げ、児童同士、教師と児童、さらには、保護者や地域の方々と協働と対話を通して交流できる学校を目指している。

特に、児童の活動で、キッズグループと称する縦割り班活動が本校の特色である。これは、高学年のリーダー性の伸長や対話や協働によるコミュニケーション能力の向上をねらいとして実施している。小規模校ではよく見られる活動であるが、中規模校以上では、メジャーではないと思われる。小規模校との大きな違いは、一班の人数が二〇人

以上と多いことである。同学年の児童が数名ずつ所属しているため、班内で縦割りでの対話ばかりでなく、同学年同士の対話も十分にできる利点がある。

一 活動の実践例

(一)運動会キッズ対抗リレー
キッズグループが、団結して取り組む協働活動である。

(二)米作り体験
グループごとに区分けした場所です。田植え・稲刈りを実施する。低学年を思いやりながら協働する高学年の姿が顕著な活動である。



低学年児童に優しく教える高学年児童

(三)ふれあい集会
会食等で、地域の方と対話

する貴重な体験である。

(四)清掃活動

奉仕的な協働活動である。

(五)キッズタイム(昼休み)

班で対話して遊びを決め、協働して楽しむ活動である。

二 成果と課題

これまでのキッズグループの取組により、高学年児童に自主

性と思いやりの心が育っている。また、低学年は、高学年を目標とし、伝統継承の雰囲気醸成されている。

縦割り班の活動の実施には、学年を越えた連絡調整及び準備が必要で、職員の負担が大きい。効率よく実施できる体制づくりが課題である。

地域と共に成長する児童の 育成をめざした教育活動の展開

潮来・大生原小 白田 美佐代

本校は、潮来市の北東部に位置し、眼下に北浦を望む高台にある児童数四九名の小規模校である。「子供たちの夢や希望を伸ばそう」をスローガンに、地域とのつながりを生かした教育活動に取り組んでいる。

一 特色ある取組

(一)保護者や地域との交流

(茶摘み)

学校には、約七〇本のお茶の木があり、毎年五月に児童、保護者、地域の方と一緒に茶摘みを行い、製茶して「大生原新茶」として学校公開日にお茶会を開き、来校者に振る舞っている。

(二)緑の少年団活動

平成一五年二月に全校児童を縦割り班に編成し組織化した。現在は、四団編成でそれ

ぞれの団長を中心として、活動計画の立案、実施、振り返りを行い、校内掲示板「緑の少年団活動センター」に掲示し、活動の確認ができるようにしている。学校や地域の生活・自然環境を整えるための活動を通して、地域に根ざした豊かな心の育成をねらいとして、花壇づくりやあいさつ運動、ボランティア活動、縦割り遊び等を実施している。下級生は上級生を手本として敬いながら学び、上級生は全体をまとめリードするという社会性・自主性を育んでいる。

(三)地域で学ぶ

地域の環境保全関係者(北浦湖岸自然を守る会)の協力を得て、北浦クリーン作戦、北浦の水質・生物調査、稲作

体験、休耕田を利用したひまわり栽培体験等を通して、地域の自然を知り、地域の環境を守って行こうとする活動を続けている。

二 成果と課題

このように学校だけでなく、地域との関係を大事にした交流活動や体験活動を通して、子供たちは、地域の良さを知り、地域を誇りに思う心が育つとともに、日々の活動や人との関わりの中で、主体的な行動力が育ってきている。本年度、緑の少年団活動による継続した地域の自然環境保全の取組が評価され、環境大臣賞を受賞した。

今後も様々な活動に工夫や改善を加えながら、地域とのつながりを生かした教育活動を推進していきたい。



北浦の水質・生物調査

地域のよさを生かした特色ある教育

土浦・上大津東小 尾崎 真里子

本校は土浦市の東部に位置し、霞ヶ浦の恵みを受けた地域であり、茨城県環境科学センターも近くにある。近年大病院が移転し、新住民が増えている地域である。子供たちは明るく素直で、元気に外遊びをしている。

子供たちが、地域の魅力を知って、将来この地域に住んで地域に貢献したいと考える子供を育てることが、地域の活性化につながるかと考えている。

地域とつながり、地域の力や環境を活用し、よさを感じさせることを計画的に行っていくことにより、地域に根ざした子供たちに育てたいと考える。

地域のよさを実感できる活動の主なものとして、本校では二年生の生活科の「地域探検」で、地域見学を保護者ボランティアと一緒にやっている。子供の興味・関心に合わせ、できるだけ多くのコースを設定し、地域の良いところを発見して分かったことや伝えたいことを広げたいけるように工夫している。また、三年生の総合的な学習の時間では、「ぼくたち、わたしたちのまち大発見!」と題して、霞ヶ

浦についての歴史や生息する動植物について調べ、まとめ報告する活動を行っている。四年生の総合的な学習の時間では、「地球の環境を守る 上大津東キッズ隊」と題して身近な水環境について調べ、自分たちでできることを考え、実践していくというプログラムを進めている。

本年度は四年生で環境について学習した内容を世界湖沼会議で発表することにした。世界湖沼会議への参加は、数年ごとに行われる世界湖沼会議のニュースが報道される度に「小学校の時、参加したんだ」という思い出を残すことになる。そして、環境問題について深く考える機



会となることと思う。

最後に地域の資源を活用する活動の主なものは、茨城県環境科学センターを活用させていただいている。出前授業をしていただいたり、センターに行つて実験を行つたりしている。子供たちが専門家の指導を直接受

今日が楽しく、明日が待ち遠しい学校を目指して

結城郡・安静小 高橋 長男

本校は、県西地区のほぼ中央にある八千代町の南部に位置し、創立一四五年を迎える。児童数は二一三名で農業が盛んな自然環境豊かな地域で、明るく伸び伸びと学校生活を送っている。「やる時はやる!遊ぶ時は遊ぶ!そして一歩前へ」のローガンのもと、本年度の取組の一端を紹介する。

一 学力の向上を図る授業改善

本校は、各種調査から基礎的・基本的な知識・技能の習得及び自分の考えを記述する等の思考力・判断力・表現力に課題がある。今年度は「根拠・理由付け・主張することのできる力を育む学習指導」をテーマとして次のことを実践している。

- ・要請訪問等における授業づくりを協働で実施

け、実験器具等設備の整った環境の中で実験を行えることは、実感を伴った理解に大いに役立つっている。

自然の豊かさやたくさんさんの環境のよさに囲まれ育っている子供たちの活躍は、将来のこの地域の活力になると考えている。

- ・少人数指導の充実(管理職等の授業参加)
- ・読書指導と関連付けた読解力向上の工夫

二 ボランティアと委員会活動

本校児童は「働き者」である。四年生以上の児童は毎朝登校するとボランティア及び委員会の常時活動を自主的に開始する。

主な活動は

- ・一、二年生の教室の手伝い・あいさつ運動
- ・草取り、樹木剪定、草花の管理
- ・動物の世話及び飼育小屋の清掃
- ・玄関付近及び流し等の清掃である。児童は来校者に「安静小はいつもきれいだね。」と言われることに誇りを

もっている。昨年度、全国学校関係緑化コンクールで入選を果たした。

三 読書活動の充実

読書は週三回朝の「読書の時間」に実施している。朝だけでなく雨の日や普段の休み時間にも教室で本を読む児童も多い。全員が五〇冊以上読書し、それが一〇年間続いている。学級文庫や図書室の本だけでなく、自分で家から持ってきたり、町立図書館からの巡回図書を読んだりしている。

四 ロング昼休みの確保

毎週木曜日は清掃をなくしロング昼休みとしている。基本は自由遊びであるが月一回程度各学級で計画を立て遊んでいる。また、学期に一回程度縦割り班での活動を実施している。「やる時、遊ぶ時」のメリハリを付けると共に体力向上にも役立つている。



市町村教育委員会と学校長会

北 県

日立市教育委員会との連携

日立・大久保小
大沢 靖司

日立市の学校長会は、小学校二五校、中学校一五校、特別支援学校一校の計四一校で構成されている。学校長会は、年九回の定例会と三回の三部会（南・中・北部会）を開催し、教育課題解決のための研修会や協議、各校の取組について情報交換等を行っている。特に、定例会では、教育研究会協議員会議や小中部分別協議会を実施し、当面する課題や行事等についての確認を行うなど、より実効性のある組織を目指して活動している。

市教育委員会とは、教育効果をより高めるための事業等の実施に向けて、以下に示すような連携を図り推進している。

一 学校長・園長連絡会議

年に二回（四月・一月）に市教育委員会主催で開催される。年度始めの会議は、教育長や教育委員をはじめ全出席者の自己紹介で始まる。その後、市教育

委員会各課より年間の主な事業の説明や報告がなされ、それに対する学校長・園長側からの質疑応答や意見等の交換が行われる。市内の教育関係者の代表が一堂に集い、市としての考え方や今後の流れ、方向性についての情報や事業内容を共有化するために、大変有意義な会議である。

二 学校教育に関する協議会

学校長会の組織のひとつである協議書研究委員会が中心となつて作成する「学校教育に関する協議書」は、次年度の本市の学校教育に関する諸条件及び市の財政措置や人事行政についての要望をまとめたものである。毎年九月に、作成した協議書をもとに校長会役員と市教育委員会の教育長をはじめ各課長が参加し、要望実現のための話し合いが行われる。厳しい財政状況の中、本協議会を経て実現できた要望事項もあり、重要な連携のための話し合いの場となっている。

三 特別支援教育支援システム

本市には県内唯一の市立特別支援学校と教育委員会教育研究所が運営する「市こども発達相談センター」がある。この二か

所が市内の特別支援教育に関する拠点となり、校長の要請を受け、小中学校の特別支援教育に関する児童生徒やその家族、教職員の支援や相談にあたっている。また、このシステムの他に教育研究所では、特別支援教育に関するハンドブックをシリーズで作成し、冊子として市内の小中学校全職員に配付し、校内研修会の教科書として活用されている。

日立市学校長会では、市全体の合い言葉である「いいところ発見夢づくり」を常に念頭に置きつつ、市教育委員会との更なる連携を図っていききたいと考えている。

東 県

潮来市教育委員会との連携

潮来・津知小
仲澤 宏之

潮来市の学校長会は、小学校六校、中学校四校の計一〇校で構成されている。学校長会は年度始・年度末と毎月一回の定例の校長研修会を開催し、教育課

題解決のための研修会や協議、各校の取組についての情報交換等を行っている。また、市教育長と指導室長が毎回同席し、講話や指導・助言をいただくとともに市の教育施策や事業の確認及び各種の情報提供にたゞき、各校の学校経営が円滑に推進できるよう連携し、潮来市教育の充実のための取組を進めている。

本市の学校教育推進のキーワードである「笑顔」がどの学校にもあふれるように、学校長会でも、「一人一人が輝く児童生徒の育成を目指す学校経営の推進」「活力ある学校を目指す組織運営の活性化」「児童生徒や教職員の意欲を高める教育環境の充実」「関係団体との連携強化」を事業方針とし、教育委員会と連携して次のような事業を行い、成果を上げている。

一 学力向上

- 小中一貫的教育の推進（小中教員の相互交流、児童生徒交流、合同研修会等）
- 英語教育推進事業（各中学校に一人、小学校二校に一人のALT配置）
- 潮来市学力向上研修会（年一回）
- 潮来市学習指導研究協議会（年三回、学力診断のためのテストの分析と対策、学習指導法研究の共有等）

- 読書環境の整備・充実（市立図書館との連携による読書環境の整備・充実）
- 中学生海外派遣事業（台湾との中学生の相互交流・ホームステイ）
- 各校へのT T T配置事業
- 二 豊かな心の育成
- いじめ撲滅・不登校未然防止の推進（Q U テストの実施と活用年二回、いじめをなくす時間の実施月一回）
- 人権教育研修会（八月）
- いじめ対策研修会（八月）
- 幼児期教育接続のための研修会（八月）
- 豊かな心育成事業（各校への講演会講師のコーディネート）

潮来市では、「教育振興基本計画・学校適正化計画」の策定をはじめ、市の教育事業に関する協議に幼小中の園長・校長が参加したり、教職員の働き方改革や学校の教育環境等について意見交換の場を設けたりするなど、教育委員会と学校長会とは良好な関係にあるが、学校長会が主体的にこれからの課題解決に取り組んでいくことが重要である。今後も、教育委員会と連携をさらに深め、児童生徒の健全な育成を目指して、学校経営に取り組んでいきたい。

特別寄稿



科学的な学校運営

坂東市教育委員会 教育長 倉持 利之

その時が来ました。やつと世論が、政治が、行政等が動き始めました。

「学校運営維新」元年がスタートしました。維新のボールが学校に、黒船のように。これをしっかりと受け止め、このトレンドを直視し、先送りすることなく、千載一遇のチャンスと

あるのではないかと思えます。最終的に、今後の日本を支える子供たちにたくましく生きぬく力を確実に身に付けるために。

「科学的な学校運営を」というと、言い過ぎになるかもしれない。経験則や教職員の献身的なオーバーワーク、そして「気合い」と称される非合理的な手法だけに頼らざるを得なかった組織も多くありました。教職員は、資質能力に優れ、依頼されれば、多少無理そうなことでも「子供

たちのため」との思いから、何でも引き受ける傾向がありました。学校に頼めば何でもやってくれる。代々にわたり積もってきた職務内容が、当たり前のこととして広がりました。

今年二月に文科省から「学校における働き方改革」に関する歴史的な通知が発出され、教育委員会と学校等が一体となった学校運営改善に向けた取り組みがスタートしました。これまでの数十年間で上書きされてきた内容を一つ一つ紐解きながら、折り合いを付け、着実に前へ進めなければなりません。この時を逃すわけにはいかないと考えます。

また、いつか来た道にならないよう、各学校に求められるのは、現場の声を発するということで、より主体的に学校運営にかかわり、管理職として自立することが大切であると思えます。例えば、新学習指導要領を受けての様々な学校運営上の課題等について、積極的に表舞台に出していく、声をあげていくことが大事になると思えます。

いづれにしても、学校運営上の課題山積の中で子供たちにしっかりとたくましく生きぬく力をつけるためには、教職員にとつても魅力ある学校づくりを目指す必要があります。課題を解決するために「学校が我慢をすれば済むから」等という流れの改善でもあります。教育委員会を含め、関係機関等が学校運営改善のトレンドをしっかりと受け止めて、それぞれが当事者意識をもちながら学校を全面的に支援していくことが、日本の本流になることを願ってやみません。

自身としても学校、保護者、地域の皆様や関係機関等と手を携えながら、「この時」をしっかりととらえ、心や身体で感じる「感覚」も大切にして、一歩前に進みたいと思えます。

読んでみませんか

「ある町の高い煙突」

著書 新田次郎作
発行所 文春文庫
日立・大沼小 岡部 毅

「今はなき、ある町の…」

学生時代、趣味の登山と相まって新田次郎の山岳小説を耽読していた。そのくせ舞台が自分の出身地（日立）にもかかわらず、この作品を紐解くのは大分二年までかかってしまった。それはこのドラマを興味本位の一つの小説として読了してはいけない、自分のふるさとのDNAを解き明かす慎重な作業であるとの直感からであった。知性、感性が成熟したのちに正対すべき、と時を待ったのだ。

平成五年二月一九日の朝、阿武隈高地の山並みはいつもと同じく冬の冷え切った青空を切り抜いて広がっていた。ただ一点を除いては…。

大煙突は日立人のアイデンティティである。旅先から戻ると東には太平洋、西には山並みからすつくと立つ大煙突が人々を迎えていた。日立人は大煙突が単なるランドマークではない

ことを知っていたから、誇りをもって見上げていた。それは近代日本の殖産興業の精華であり、日本で唯一の平和的解決をみた公害問題の象徴であり、住民代表の関右馬允氏と経営者の久原房之助氏のしのぎの削り合いが作り上げた一里塚だからなのだ。新田次郎はこの壮大なドラマを「プロジェクトX」を思わせるドキュメンタリータッチで、さらに気象庁測器課長であったキャリアを武器に、実に詳細かつ科学的に表現している。そこには池井戸潤のテレビドラマを思わせるように禍福が繰り返され、読者がページをめくる手をとどめることを許さない。

同時に横糸には自分の夢をも捨て村に殉ずる決意を抱く、強い意志をもつ主人公が、美しい鉱山技術者の妹「千穂」と、幼い許嫁「みよ」との間に心揺らぐ、当たり前の心の弱さを織り込み、共感させる。ドラマはそんな彼に冷徹で悲しい事実を突きつけ、いつ果てるともしれぬ闇に駆り立てる…。

実在の身の回りの地名などがちりばめられたこの小説は、何度読んでも既視感にも似た浮遊感を味わわせてくれる。私にとつての日立市民としてのアイデンティティを再確認させる一冊である。

梅のかおり

—先輩校長から—



生涯学習の第一歩



前・町立 立長中学校
前・大子中学校
仲野 朝美

「あなたは周りの人に恵まれます」の言葉通り、多くの諸先輩方、同僚、児童生徒、保護者、地域の方々に恵まれ、退職を迎えることができました。本当にお世話になりました。

さて、離任式当日、勤務校の温かい式を挙行いただき、感動のうちに見送られました。その見送りの最後尾に、横断幕がひとときを輝いていました。持っていたのは、昭和五七年度に卒業させた潮来町立津知小学校の最初の教え子たちとその子供たちでした。潮来市や鹿嶋市、遠くは千葉県から駆けつけてくれたのです。周りの人に恵まれているという実感を改めて感じ、涙

が止まりませんでした。

現在、生涯学習に関わる仕事に就いております。学校や市町村の講師派遣の相談や視聴覚教育関係の企画運営、県民大学のサポートなど、退職された校長先生方と仕事を共にしております。新たな出会いに感謝するとともに、生涯学習の面から子供たちや地域の方々に恩返しできればと取り組んでいます。これからも「感動」「感謝」を大切にして、県民の方々はかりでなく、自分自身の生涯学習にチャレンジしていきます。

退職を機に



前・水戸市立 国田義務教育学校
吉井 由隆

多くの皆様に支えられ、お陰様で何とか無事に退職の日を迎えることができました。校長の重責を果たしほっとしている、これが今の正直な気持ちです。私は現在、水戸教育事務所に

勤務し、教職員の履歴や教員免許の事務に携わっています。慣れない仕事で戸惑うこともありませんが、新しいことを覚え、吸収する喜びを感じながら勤務しています。働く場所があり、多

少ななりとも先生方の役に立つことができ、これは本当に幸せなことだなあと、しみじみと感じる今日この頃です。

退職を機に、仕事と生活の調和のとれた暮らしを心掛けています。家族との時間を大切にするとともに、健康づくりや地域活動への参加にも努めている所です。心にゆとりをもつて朗らかに暮らす、そんな生き方を続けていきたいと思っています。

結びに、会員の皆様一言申し上げます。校長職は毎日が勤務の連続です。全てを一人で抱え込まず、困った時には校長会の仲間と相談してください。互いに高め合い、支え合うための校長会なのです。皆様のご健勝にて、益々ご活躍されることを、心よりお祈りいたします。

気ままにウォーキング



前・日上市立 助川小学校
額賀 隆

「光陰矢の如し」三十七年間はあつという間でした。地域や保護者の方々、そして、子供たちに恵まれ、充実した教職生活を送ることができ、感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありが

とうございました。

今、平日は、帰宅後自宅の周りを気ままにウォーキングすることが楽しみのひとつになっています。歩いていると、今まで気付かなかったさまざまな発見があり、毎日がとても新鮮です。風を感じ、匂いを感じながら気ままに妻と一緒にウォーキングをしています。

そして、休日は、ちよびつ旅。行ったことのない山や土地を訪ねています。旅に行く前のワクワク感、目的地での思いがけない発見に驚きや感動を覚えるなど、まさにちよびつ旅は明日への活力になっています。

今後は、自分自身をよく知り、自分に合った人生の楽しみ方をしていこうと考えています。「こういう生き方もあったんだ。私にはこういうことができる。私ももうちよびつとがんばってみようかな。」と自分の身の丈に合ったことを考え、一步一步ゆっくりと歩いていこうと思います。

さらに広い視野で



前・行方市立 北浦中学校
横田 英一

「やることがないほど苦痛な

ことはない。できる限り社会に出ていくように。」退職する際にある先輩からいただいたアドバイスである。

お陰様で退職後も、教育関係の仕事をしなが充実した日々を送っている。その中で一つ心掛けていることは、様々な職種の人との繋がりを大切にするこことである。その付き合いの中で、近い将来、産業構造や就労構造が大きく変わるだろうという話を聞くことがある。実に切実な話である。AIの登場により、変化は益々加速するだろうと思う。そのような話を聞くたびに感じることは、自分の未熟さと視野を広くもつことの大切さである。

現在の教育改革は、社会の激変に対応できる人間の育成に視点が向けられている。そして、社会に開かれた学校づくりが求められている。その際に大切なことは、現役時代の私にはできなかったが、教師も、今まで以上に社会と繋がりが、変化を敏感に感じる感覚をもつことだと思

う。地域社会の一員として、社会に開かれた学校づくりに少しでも貢献できたらと考えている。

無意識の言葉



前・守谷市立
高野小学校長
椎名 和良

三月から六月にかけて、何度か教え子たちの同窓会に招かれた。担任をしていたのは新採から一三年間で、その間、卒業生を出したのは、小中学校を合わせて五回で、教え子たちも四〇歳代である。小学校や中学校時代の思い出、現在の仕事や家族、子育てなどの話を、多くの教え子たちと語り合い、下戸の私もアルコールが、気持ちよく入っていた。

その中で、一人の教え子の会話で、はっとさせられたことがあった。昭和五〇年代の後半で当時の勤務校も元氣な子供たちが多い中、その子が悩んでいた私にかけてくれた言葉を話したら、その教え子はまったく覚えていない。また、その子に私がかけた言葉も私自身はまったく記憶にないのに、その子はよく覚えていた。お互い無意識にでた言葉が、その後もずっと心に残っていたのである。

科指導という認知の習得の部分であり、非認知のところには、無意識の言葉のほうに、潜在意識に触れることを改めて知った。AIがいくら進んでも、教育は、やはり人が行つてはじめて成り立つことを実感させられた。

地域に根ざす



前・稲波市立
阿波小学校長
森永 祥仁

三月に三八年間の教職生活を無事に終えることができました。これまでお世話いただいた先生方に心より感謝申し上げます。

退職後は地域に根ざし、第二の人生を充実したいと考え、現職中は行き届かなかった栗畑や柿畑の管理に汗し、菜園程度の小さな畑で野菜栽培を楽しんでいます。そんな日々の生活の中に、隣人や農作業の先輩方から多くの助言や温かなふれあいがあります。日常の温かな関わりが生きて喜びに繋がると感じています。そして、「雨読」という程ではありませんが、読みたいと思う本に親しむようにしています。現職中から興味があった「発達障害」に関する著書や話題のAS・LD・AD/HDの

作家、沖田×華（おきたばつか）氏の作品、手塚治虫文化賞受賞、矢部太郎氏の「大家さんと僕」など心温まる作品にも親しんでいます。さらに、家族旅行や一人旅、好きなアーティストのコンサートも積極的に楽しんでいきます。

退職して半年、心身に少しの余裕が出てきました。今後は恩返しの意味でも地域や社会のために何ができるかを考え、実行していきたいと思っています。末辞となりますが、県学校長の発展と会員の皆様のご活躍を心よりお祈り申し上げます。

ノーブレイ ノーエラー



前・結城市立
結城中学校長
塚越 敏典

四月から茨城県近代美術館で学芸員さんと共に「美術課」の仕事させていた。免許外で美術を担当したことはあるが、今の仕事に生かされるスキルは皆無。依頼された資料を探すにも作者先生の名前が読めず、「ス」の欄で「水戸」をさがし「見当たりません！」といったようなことが度々である。

「学校教育から離れたところ

で再任用として働きたい」と、この仕事を選んだ。生意気なことを言ってみたら、現実には世間知らずの役に立たない面倒くさい親父で、三月までの校長室との勝手違いにストレスもたまつた。

自分の残りの人生がどれだけあるのかは神のみぞ知ることである。これまで生かされてきた感があったが、現在は「ノーブレイ・ノーエラー」で、人生はまだまだこれから本番だと、自分自身に発破をかけている。来月から、これまで戯れで行っていた「ものづくり」の本格的な研修を始める。退職して得られた自分のための貴重な時間を有効に使っていききたい。

現職の皆さん。外からは「学校の常識は世間の非常識」が見えます。自分に限って言えば、もっと外から眺めるように努め、世間を知った上で学校経営をするべきだったと反省しています。

置かれた場所で



前・下妻市立
豊加美小学校長
中條 美恵

「不審者情報について」「熱中症対策のお願い」…等々、時

折私のスマホが前任校からの配信メールで学校の情報を教えてくれる。その度に現場の先生方の苦労を思うとともに、あれだけ日々夢中で取り組んできた学校の諸行事がいつの間にか自分の意識から遠のいていくことに気がかされる。

学校現場しか知らずに定年退職を迎えた今、一步離れて学校現場を見てみると、学校がいかに多くの課題を抱え、先生方がいかに日々奮闘しているかを改めて感じ、現場の先生方には頭の下がる思いである。

さて、私は現在、社会教育指導員として週三日公民館勤務をしている。この利用者は大部分が人生の先輩方であり、学校とは違った出会いや発見があつて勉強になることも多い。

そして、残り四日は私の時間。退職したらあれもやりたい、これもやりたいと考えていたの、まずは健康づくりを基盤に、趣味の充実や旅行等、手探り状態ながら一つずつ実践に移しているところである。

これからは、自分の居場所での今の自分にできる社会貢献も見つけながら、少しでも自分を磨き、心豊かに第二の人生を送っていきたくと考えている。

ひばり



「天神山より眺める菅生沼」
猿島・猿島小 小林 晴美

教育のつながり

小美玉・野田小
藤田 康広

前任校ですばらしい生徒の姿を目の当たりにした。挨拶、授業の集中力、清掃への真摯な取り組み、部活動の一生懸命さ等々。勤務の長い先生に尋ねたところ、「ここ数年いい状態です。でも、来た頃は大変だったんですよ。」学校には、いい時もあれば大変な時もある。歴代の先生方のご苦労があつての今の姿かと二年間気持ちよく勤務した。今年度縁あつて学区内の小学校に赴任した。二〇年空けての小学校勤務である。昔を思い出

そうとしても、断片的なものか浮かんでこない。そんな中、日々を過ごすうちに新たな発見をした。先生方の巧みな声かけによる意欲的な学び。師弟同行の清掃。数々の行事への効果的な支援。何より、朝、職員室で顔を見たら、次に会うのは放課後ということもある毎日。さまざまな教育活動において、常に一人一人に寄り添って支援する姿や保護者との細やかなやりとりを目にするにつけ、あの中学生の姿は中学校の先生方の苦労や努力だけではない。基礎はここで築かれているのだと強く感じた一学期だった。

自信をもって 言い切る生徒を

東茨城・第一中
飯田 研一

大洗町教育プランの「海をのぞみ未来を拓く大洗っ子の育成」を実現するためには、「自信に満ちあふれた児童生徒の育成」が重要であると考えます。

大洗町勤務が一八年目を迎える私にとって、「教え子からの学び」は、教員としての何よりの宝であり、財産であります。

転勤のとき、野球部の子供たちからメッセージ入りの色紙をプレゼントされました。感謝の気持ちと今後の抱負が語られていました。「夢の実現に向けて頑張りたいと思います。」(思い)

「目標達成に向け頑張ります。」(決意) といったメッセージの中に、一人だけ「自分の夢を必ず実現させてみせます。」(強い決意と自信)と書いてきた生徒がいたので。そこには、自信に満ちあふれた強い決意が表現されています。「こんな子供を一人でも多く育てなければ」

そう強く思いました。いや、育てます。育ててみせます。

「海をのぞみ未来を拓く大洗っ子の育成」に向け、自信をもって「言い切る力(生きる力)」を身に付けた児童生徒の育成に最後まで全力で取り組みます。

震災から学ぶ

北茨城・大津小
萩合 正教

県の最北端に位置する北茨城市大津町は、東日本大震災により大きな被害を受けた。津波は港町を飲み込み、六角堂などの文化遺産も波にさらわれた。市内の死者・行方不明者・関連死者計一〇名の命が奪われた。家を奪われた人も五千名を超えた。復興には莫大な予算と時間が必要であった。福島第一原発事故の放射能汚染問題は、復興を複雑化し、大きな障壁となった。

地域の人たちは、自分たちが瓦礫を処理し、一軒一軒を回って寄付を募った。震災から一月後には、天皇・皇后両陛下が大津漁港をご視察され、避難所では、膝をついて一人一人にお声をかけられた。石井竜也氏(米米CLUB)は母校の大津小学校を訪れ、子供たちと一緒に歌をつくり歌ってくれた。復興には、人と人との温かき強い絆が必要不可欠であった。

震災から七年が過ぎ、落ち着いた日常生活が戻りつつある。来年度も、震災を知らない新入生が入学してくる。この子供たちに震災のことをどのように学ばせていくかが大切である。

地域とのつながり

潮来・延方小
山田 真奈美

「いばらき教員応援団」の研修会で、白駒妃登美氏の「歴史が教えてくれる日本人の生き方」という講演を拝聴した。お話では、ご自身が大病を患い命と向き合う中で、歴史や先人の生き方から学んだことについての内容であった。

この講演から、現在勤務する延方地域に古くから伝わり県指定文化財に指定されている「延方相撲」が思い浮かんだ。由来は江戸時代までさかのぼり、水戸藩と徳川光圀の力が感じられるものである。本行事には、本校PTAの方々が練習計画、当日の運営の中心となり、五・六年生の男子児童が参加している。まわりの巻き方、所作についてかつて力士だった方の懇切丁寧なご指導でみるみる上達していった。相撲祭当日は、暑い中ではあったが、今まで教えていただいた練習の成果を発揮し、力が入った取組であった。優勝力士には、横綱が贈呈された。

今年の体験をもとに、育った自慢の地域を忘れず、今後も歩いてもらいたいと願っている。

美しい子供の表情

牛久・牛久南中
岡野 あつ子

「どんな子供に育てるかということは、教師の意識によって変わってきます。物を覚えることを重要視する教師は、自然にそのような授業になるだろうし、物を考えることを重要視する教師は、またそのような授業になるというものです。授業の中で、子供たちが深い思索に入りこむと、表情が明るく生気がみなぎってきます。それは、造形の神がもたらした、人間の一番美しい顔のように思えます。子供たちが思索する時間が多くなればなるほど、より豊かな人間に育っていくように思えます。授業の中で美しい子供の表情を見ていると、私はよい授業を創らねばと、つくづく感じさせられるのです。」

これは、私が教師になりたての頃に買って読んだ本の一部です。写真もたくさん載っており、子供たちの喜びの表情・発見の驚き・触れ合いの中の安心感など、一つ一つの表情・目の輝きに魅せられ、この本を読み込んだものでした。あれから三〇数年、今でも同じ思いをもって自分のいます。本校のテーマは「一人一人が輝く、潤いと感動のある学校生活」です。先生方と共に、豊かな表情・輝く目を学校いっばいにしていきたいと、日々取り組んでいます。

祭りだ！「わっしょい」

つくば・谷田部南小
室町 正雄

「わっしょい、わっしょい」本校体育館で、谷田部幼稚園の「夏祭り」が七月に開催されました。毎年この夏祭りに本校の一・二年生が招待され、園児に声援を送りながら、一緒に踊りゲームに参加しています。

本校と谷田部幼稚園は、同じ敷地にあり、校舎等を共有しています。本校児童九三名に対し、幼稚園児が一五二名と多く、とても賑やかです。このような環境の下で、幼小の交流が盛んです。毎月幼稚園で行われる「お話し会」や幼稚園保護者会主催の「音楽コンサート」に、本校児童も参加しています。避難訓練や引き渡し訓練も合同で行います。また、サツマイモを共同で育てています。保育参観で園児の特性を理解し、小学校教育に生かしています。

WE LOVE SEKIYO

筑西・関城中
信田 和己

「君たちの真剣なまなざしから地域の未来を感じます。」

この言葉は、関城中学校区で今年度から取り組んでいる「絆づくりプロジェクト児童・生徒推進会議」に集まった子供たちの話合いの様子に心から感動し、発したものでした。目の前にいる子供たちが、将来、よりよい地域の実現に向けて、生き生きと活躍しているであろうことが確信できたからです。

この日、学区内の学校から集まった代表の児童・生徒が話し合った結果、子供たちが思い描く自分たちにとって居心地のよい学校、それは一人一人の児童・生徒が互いのよさや持ち味を発揮し合い、互いに認め合える「いじめのない学校」でした。子供たちが、学区内の三つの学校のことを自分事として真剣に考え、話し合いを進めていく姿に、改めて子供たちのもっている力（創造力）を感じ、思わず冒頭の言葉が出てきたのです。

「教員不足」に思う

坂東・生子管小
針替 直哉

子供たちが自分たちの手でよい学校をつくっていくこととするのは、地域の未来に直結していきはらずです。郷土をこよなく愛し、自分たちの力と可能性を信じ、自分たちの手でよりよい社会を実現していこうとする子供（将来の大人）を地域と共に育てていきたいと思えます。

先日の新聞で、教員不足が全国で五〇〇人との報道があった。その原因について「産休・育休取得者の増加」「教員志願者の減少」と「採用予定者が他に就職している」等を挙げた。またある紙面によると、教員の労働環境が過酷であるために敬遠されているという。確かに社会情勢の変化で職務内容が以前より複雑化し、対応に苦慮する部分もある。また教員の大量退職時代を迎え、全般的に絶対的な教員数が足りないことも一因かと思う。しかし労働環境や複雑化の問題で敬遠されるのは、寂しい限りである。

教員という職業を改めて考えてみれば、次の世代に知恵や考えを伝える仕事であり、何より人を育てる魅力的な仕事ではないかと思う。いつの時代でも教育に困難な問題はあろう。しかしその困難を乗り越える醍醐味もあるはずである。今の時代、もつともつと、教員の魅力や夢を伝える機会を生かして発信していくことが大切なのではないかと思っている。また同時に新採教員が、約三〇数年後に教員でよかつたと言えるような職場環境を作る責任を痛感している。

お詫び

前号にて筑西市立鳥羽小学校長富山秀男先生のお名前と学校名の文字に誤りがございました。正しくは、右記のようになります。ホームページには訂正して掲載いたしました。心よりお詫び申し上げます。

編集後記

今号の特集は、「特色ある学校経営」、「先輩と語る会」を掲載いたしました。いずれも貴重なご意見でした。

原稿をお寄せいただきました皆様や、私たちに応援と激励のお言葉をいただきました先輩の皆様にご礼申し上げます。